

四八年目の卒業式

花澤 怜子

千葉市中央区

平成五年四月十一日の朝、区立桃園第三小学校の体育館には、在校生の祖父母のような年配者が次々と校門をくぐって訪れた。昭和十九年度卒業式という看板に足を留め、大櫛おびのこずえを仰ぎ、プール横のヒマラヤ杉を眺めながら。それは何事もなければ昭和二〇年三月に卒業したはずの二二回生達であった。

当時三〇〇名以上の同期生も、それぞれ手を尽くして判明した者約一五〇名、すでに三〇名に近い物故者、当日の出席者七〇余名、九州、関西、東北の各地からも、車椅子、盲人用の杖を頼りの参加者、いづれも半数以上が疎開以来の邂逅ぐわいごうであった。

教育委員会、学校及び各関係者の格別の配慮により、念願の卒業式を実現出来た感激は筆舌に尽くし難い。

昭和十四年四月、日中戦争の最中に桃園第三尋常小学校に入學した私達は、十六年十二月八日には太平洋戦争、学校も国民学校と名称が変わり、次第に戦時色に塗り込められて行く学校教育の中で成長して行った。防空演習、避難訓練、集団登下校、十八年四月十八日初めての東京空襲の飛行機を見て以来、日常

生活はあらゆる面で厳しくなっていた。

十八年秋頃から級友達が縁故疎開で一人二人と地方へ去り始めた。そして十九年四月、私達が六年生になった年から学童疎開が本格化し、縁故のある者は個人で疎開を、疎開先のない者は学校からの集団疎開を余儀なくされ、一学期の終わりには校内が騒然となっていた。私の級では転校する級友が出る度に送別会を、と担任に授業中止を強引に申し立てたことを記憶する。

やがて、子供達にとって世にも不思議な夏休みが訪れた。宿題も出ない、登校日もラジオ体操もない。しかし、嬉しいより不気味であった。中野区内の各学校から集めた生徒で試験疎開が始まり、その二次団に加わって山梨県の恵林寺へ向かう疎開列車に乗った級友を見送るため、中野駅西側にある総武線の引込線の柵をくぐり抜け、レールの上で列車に手を振った光景は今も鮮やかに浮かんで来る。

学校はプールを開放し、私達は毎日午後プールサイドに集まっては別れを惜しんだ。その人数も日毎に櫛の歯を引くように

少なくなつて行つた。そして八月二三日、長野県上伊那方面へ集団疎開出発の日、私も母に連れられ、すでに四月上旬疎開していた弟達のいる母方縁戚の疎開地和歌山県下へと向かつたのだつた。

一夜にして子供達の消え去つた街、それはあたかもハーメルンの笛吹きに連れ去られた昔話にも似た異様な現象だつた。一抹の不安と未知の土地への好奇心、再び帰京出来るのかという漠然とした疑問、さまざまな思いを抱いてその夜私達は親許から離れて行つたのである。しかし、子供達の行手の山の向こうに幸いはなかつた。終戦までの歳月は辛い現実が待つていたのである。

当時、東京と和歌山県御坊は二〇時間余りの長旅であつた。夜行列車で東京を発ち翌朝大阪へ、地下鉄で難波へ出て南海電鉄で和歌山市駅、電車で和歌山駅へ、そして紀勢西線の発車を待つ間、珍しくホームで駅弁を売る声に母が買い求めたら、二段折箱の下段には米飯の代わりに蒸した馬鈴薯の薄切りが並んでいた。

汽車の油煙で汗ばんだ肌に模様が出来る夕刻、ようやく到着した駅の改札口には第二人が飛びはねるように手を振つて待っていた。

数日後、私達が学校に行つている間にひとり帰京して行つた母。その後約一年半の疎開生活は、いままつて弟達と話し合う

ことすら出来ぬほど子供にとっては過酷な生活であつた。

私の転校した和歌山県日高郡藤田国民学校は、急流日高川の蛇行する海岸平野の農村地帯にあり、当時出征兵士で人手不足の農村は猫の手も借りたい農繁期には勤労奉仕に頼るため、小学生まで農作業に加わり、私は転校初日から田に入り稲の害虫駆除作業に加わらねばならなかつた。

当時の大都市住民にとっては、疎開は国の指針方策であり、子供達には学童疎開令という至上命令でもあつた。被疎開者は国の方針だからという気持ちで疎開地へ赴き、受入側では仕方がないという態度であつたと思う。すでに戦争末期の生活状態は何よりも食糧事情が困窮していたため、限られた地域の人口増加は迷惑そのものであつた。疎開者は正に地域社会へのちん入者であり、邪魔者扱いを受けても致し方なかつたのである。

私達姉弟の疎開生活は、複雑な家庭事情で終生私の家に寄食し続けた父の異母姉の伯母を、老人、子供の疎開が叫ばれて止むを得ず、両親は私達の世話をするという名目で母方祖母の生家へ一緒に行かせたのである。祖母の末弟の大叔父の持家一軒を借りて疎開生活が始まつたが、窮迫した生活事情の許に異母子の親族が割り込むことは生活混乱のもとであつた。父方母方双方の親族間の板挟みになつた私達姉弟は、遂には双方から責任を抛擲ほうてきされたのである。私より一足遅れて疎開地へ来た母方の祖父母と、先住者意識の強い伯母との間には勿ち蹉跌が生じ

出した。そして、遂には祖父母共私達を孫として扱うのを拒みだした。それは前年叔父の許に嫁いで来た若い叔母を、八月に召集された叔父から託されていたからである。祖父母にとつて、長男の連れ合いは外孫の私達とは比較にならぬほど大切な存在であった。伯母は嫌々世話をしていた私達を、自分の立場も忘れて見放したがりに出した。大人達の諍の渦に巻き込まれた私達は、正に蝙蝠的存在であった。家の中でも座る場所すらはばからねばならず、乏しい食事どきにも落ちていて満足に食べていられなかった。

家主である大叔父は、冷やかに私達の生活を見つめるのみであった。

私達は学校だけが救いであったが、その学校ですら弟達は順応出来ず、四年の弟はいつも涙ぐみ、二年の弟は沈黙してしまつた。私は友人に溶け込むことに必死だつた。幸い同級生は私に手を差し延べてくれた。

つらい農作業も家に帰るより遙かにましだつた。田の害虫駆除に始まり、干草刈り、芋堀り、やがて稲刈り、落穂拾い、切株堀り、麦踏み、薪運びなど、あらゆる作業が子供達に課せられ、働き続けて六年は終わった。

東京に帰りたい。しかし、もう汽車の旅など望むべくもないほど空襲も激しく、私は帰京しての進学をあきらめ、地元の県立高女へ進学した。

国民学校の卒業式も、女学校の入学式も、私には付添いの親はいなかった。進学とは名のみ、入学後一か月も経たずして勤労作業が始まつた。食用雑草刈り、薪搬出作業、やがて麦刈り、田植。しかしその頃、突然学校のある田舎町に軍隊が駐留し、校舎の大部分は兵士達の宿舍となり、中等学校生徒は本土決戦に備えて軍隊の指揮下で、敵前上陸の防禦陣地構築作業の下働きに総動員された。

かつて紀州藩公德川頼宣が奨励して植林した松林は、数百年の風波に耐えて、その名も煙樹ヶ浜の名にふさわしく、昼も小暗い木の下陰を成す老松が生い茂り、日高川河口から紀伊水道の難所・日の岬の山裾まで延々と海岸線を彩っていた。その浜の砂や砂利を藤づるモッコに満載したものを二人一組になって海辺から松林を縫って県道まで担ぎ出す作業が、女学生の私達と兵士達によって開始されたのだつた。

連日過酷な労働で貴重な靴を失わぬため、毎夜暗幕に被われた暗い電灯の下で、慣れぬ手つきでわらぞうりを編むことが日課となり、雨期にさしかかったため雨天の日は狭い校舎で教科書を開いても、すでに過酷な勤労作業が日常となつてしまった身には時たまの勉学は苦痛となるばかりであった。

兵士達は私達が磨き込んだ教室や講堂で起居し、運動場で炊飯をし、周囲にはロープを張りめぐらして学生達は近づくことすら出来なかった。

空襲も日を追って増し、艦載機の飛来は殊に激しく、瞬時に頭上に襲いかかり、黒い風防ガラスの中に顔さえも見えないほど間近で機銃を連射されるのだった。B 29の爆撃も度を重ね、小さな田舎町は幾度火柱が立ったことか。煙樹ヶ浜の松林の中に点在する、やまももの木に紅い実の熟れ出した頃の大空襲で、ついに級友の一人が爆死した。

「負ける」という言葉すら許されぬ学校教育の中で、戦争への疑問など抱くべくもない動員作業、そして突然の終戦。涙ながらに終戦を告げる校長訓話に嗚咽する教師や上級生をそっと眺める私は、これで家へ帰れる、と涙はおろか安堵と喜びをおさえるのに苦心した。

戦争は戦闘員のみでなく、非戦闘員、幼い子供達まで巻き込まれるということ、戦争を知らぬ世代の人達に伝えることが私達の責務ではないだろうか。

遙か五〇年近くも経たあの日々を、空襲のサイレン、B 29の鈍い爆音、そして、機銃掃射下を必死で逃げ回る夢に、いまもってさいなまれる私達の世代が後世に伝えることは、戦争は子供達までも犠牲にしてしまう、という体験を生かし続けてほしいと願うことである。

終戦の年、昭和二〇年三月に授与されるはずであった卒業証書、縁故疎開者も含めての今回の卒業式は、終了証書として全員に授与という破格の配慮のもとに、還暦を迎えた卒業生は涙

して証書を握り締めたのであった。

